

戦後80年平和祈念・大阪戦没者追悼式事業 記念誌

次世代へつなぐ想い 平和への誓い



大阪府・大阪市・堺市
(令和7年12月刊行)

戦後 80 年平和祈念・大阪戦没者追悼式

大阪府戦没者之霊

今年 令和7年は、終戦から80年を迎える
節目の年です。

先の大戦による大阪府内の戦争犠牲者は
12万7千余名の多きに及びました。

戦争犠牲者を追悼するとともに、再び戦争
の惨禍が繰り返されないよう、その教訓を
次世代に語り継ぎ、恒久平和への誓いを
新たにしていかなければなりません。

今回取り組んだ「戦後80年平和祈念・
大阪戦没者追悼式」事業をご紹介します。
戦争体験談や「平和を願うメッセージ」
を読んで、改めて平和について考えて
みませんか。

目 次

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 1～12 | 戦争体験談～平和への思い～ |
| 13～14 | 戦後80年平和祈念・
大阪戦没者追悼式の様子 |
| 15 | 「戦争体験談を聞いて平和の大切さ
を学び考えよう」の様子 |
| 16 | 平和を願うメッセージ |

大阪府内にお住まいの戦没者遺族等の方13名にお話を伺いました。
体験談全編は「大阪戦没者追悼式」公式YouTubeチャンネルでご覧いただけます。



私の戦争体験と終戦の日

おかくら さぶろう
岡倉 三郎さん (大阪市・昭和11年生まれ)

終戦を告げる静寂

昭和20年(1945年)8月15日。ただ、ただ静かでした。正午にはラジオ放送が流れ、まだ幼かった私には難しい内容でしたが、重大なことを告げられていることは何となく感じ取っていたのです。後に父から、日本が戦争に負けたことを伝えられました。先への不安はありましたが、サイレンの音に怯える日々が終わったことへの安堵の気持ちでいっぱいでした。

学徒動員で戦地に赴いた兄

学生も戦場に駆り出される「学徒動員」がはじまり、兄も召集され、1週間後には中国に渡りました。その後は、1枚の絵葉書が届いたのを最後に終戦を迎えても、兄は戻らず、戦後に届いた白い箱には「戦病死」と書かれた紙1枚だけが入っていました。

炎の海に消えた故郷

昭和20年(1945年)、疎開先の奈良から一時帰省していた大阪で忘れられない光景を目にしました。お使用で訪れた小学校の屋上で、空襲警報が鳴り響いたのです。物見台から空を見上げると、B29の編隊から雨のように黒い粒がばらまかれ、それが花火のように空中で広がりました。焼夷弾でした。

それらが地上に降り注ぐと、街はあっという間に煙に包まれ、真っ赤な炎の海へと変わっていきました。

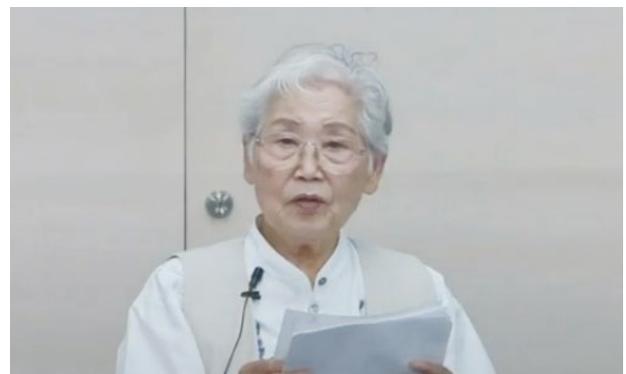
大地が揺れるほどの爆撃

私が体験した2度目の空襲は、終戦の前日、昭和20年(1945年)8月14日に投下された1トン爆弾による爆撃です。

私は家の防空壕に避難していましたが、爆弾が近くに落ちるたび、まるで船に乗っているかのように地面が激しく揺れました。防空壕の壁が圧力で縮んだり広がったりするのを感じ、「このまま圧迫されて死んでしまうのではないか」という恐怖を味わいました。爆撃が止んで外へ出てみると、家の屋根の上に作られていた監視哨が跡形もなく吹き飛んでいたのです。もしあの時、防空壕に入っていなかったらと思うと、今でもぞっとします。

戦争を知らない世代へのメッセージ

戦没者に対しての一番の供養は、この国の平和と繁栄がずっと続くことだと思っています。自分自身、戦争を経験し、皆さんにはあのような怖い目にあってほしくないで、「戦争はやっぱりしてはいけない。平和が大切。」ということを理解いただくため、一生懸命、平和学習活動等に力を入れています。



戦争と平和を語り継ぐ紙芝居

「光ちゃんたかいたかい」

いのうえ ともこ
井上 倫子さん (和泉市・昭和22年生まれ)

風化したラベルと戦争の記憶

私の家の玄関には、「遺族の家」という劣化したラベルがあります。

ある日、孫が「おばあちゃん、これ何？」と尋ねてきました。その出来事をきっかけに、私は主人と「戦争の歴史を伝えていかなければ」と話し合い、紙芝居という形で未来へ残すことにしたのです。

【第一部】 平和な日常と戦争の影

昭和18年（1943年）の年明け、戦争中とは思えないほど平和なある村に元気な男の子が生まれます。赤ちゃんの名前は「光（こう）」と名付けられ、家族から「光ちゃん」と呼ばれ、愛情を一身に受けてすくすくと育ちます。

しかし、村の平和とは裏腹に戦争は激化。若い学生も戦地へ駆り出されるようになりました。

【第二部】 父との別れ「光ちゃん たかいたかい」

光ちゃんが生後4ヶ月の春、父にも召集令状が届きました。出征前夜、父は眠る光ちゃんを座布団に乗せ、静かに揺りかごのように揺らし続けます。座布団を揺すりながら、どんなお話をしていたのでしょうか。数ヶ月後、戦地へ向かう父の行進が、目の前を通り過ぎる瞬間、祖父は光ちゃんを天高く掲げ、「光ちゃん、たかいたかい！」と叫びます。振り向いてほしい一心で絞り出した声に、父はたった一度だけ振り返り、光ちゃんを見つめました。

【第三部】 終戦と戦争が残したもの

父の戦死の知らせは突然届きました。昭和20年（1945年）4月、ソロモン諸島で戦死したのです。父は白い布に包まれた粗末な木箱となって帰ってきました。箱の中には遺骨はなく、石ころが2つ入っただけでした。母は人前では決して涙を見せませんでした。

8月15日、戦争は終わりましたが、父は帰ってきません。光ちゃんの記憶には父の面影はなく、自分とそっくりなセピア色の写真が1枚残されただけです。

母は戦死したと分かっている、復員兵の中に父を探し続けました。かまどの隅で隠れて泣いていた母の姿を、光ちゃんは今も忘れることができません。

戦争を知らない世代へのメッセージ

戦争が終わってから80年以上が過ぎ、日本は平和な国になりました。しかし、世界のどこかでは、今も爆音が響き、子どもたちが悲鳴を上げて逃げ惑っています。

戦争は、静かで平和な村にも大きな悲しみをもたらし、人々の心までも壊してしまいます。お父さんの顔も知らないまま82歳になった光ちゃんのように、戦争は数えきれない家族に癒えることのない涙を残しました。戦争から平和が生まれることは決してありません。

そんな悲しい涙のもとに、かつてこの国に戦争があったという事実を、私たちは決して忘れてはなりません。なぜ戦争が起こるのかを問い続け、平和の尊さを知ることが大切です。そして、あなた自身の命を大切に生きてください。



戦死した父と戦後母と歩んだ道

にしじま みやこ
西 嶋 美 八 子 さん（藤井寺市・昭和19年生まれ）

父の出征と戦時下の暮らし

私が生後2ヶ月で、父は赤紙が来る前に自ら志願して戦地へ向かいました。残された母との生活は過酷で、母乳の代わりに与えられたのは、すり潰した米を炊いた汁でした。食料は配給米だけでは足りず、母は私のことを簡単な乳母車に乗せ、田舎まで着物と食料を交換しに行く日々。おむつは古い浴衣などを潰して手作りしたものでした。夜は灯火管制のため、

ランプの光が外に漏れないように布で覆い、わずかな明かりの中でおむつを替えるなど、不自由な暮らしを強いられていました。

父の戦死と空っぽの遺骨箱

父は出征から3ヶ月後の昭和19年（1944年）7月、サイパン島で戦死しました。「絶対に生きて帰る」と家族に誓った父とは対照的に「俺は死んで帰る」と言って出征した叔父は無事に生還する結果となりました。私は2、3歳の頃、母と叔父に連れられて父の「遺骨」を受け取りに行った記憶があります。大きな建物で手渡されたのは、白い布に包まれた桐箱でした。家に帰り、箱を開けると遺骨はなく、父の名前が書かれた1枚の紙切れだけが入っていました。母親は涙も出なかったとよく言っていました。

戦後の貧困と父のいない子ども時代

父が居ないだけでいじめを受けることもありました。当時は貧富の差が激しく、私の家は本当に貧しい暮らしでした。学校へは母親が古着を手作りで直した服と下駄で通い、新しい靴や服を買ってもらえませんでした。遠足や修学旅行といった学校行事に参加もできず、多くの楽しみを諦めました。病弱な母を支えるため、中学を卒業して働きに出る以外に道はありませんでした。

家族の記憶と父の面影

母は当初結婚する気がなく、戦争に行く父に説得されて夫婦となりました。一緒に過ごしたのは2年ほどでした。父を伝える品はボロボロになった1枚の写真のみ。後年になって綺麗に作り直してもらった海軍の帽子を被った父の写真が今も私の手元にあります。

戦争を知らない世代へのメッセージ

今の世界の情勢を見ていると、皆さんの未来に強い不安を感じずにはられません。どうか忘れないでください。戦争とは、皆さんのような若い世代が当たり前の日常を奪われ、戦場へと駆り出されるということです。どんな理由があろうとも、そのような世の中を二度と作ってはなりません。父が「絶対に生きて帰る」と誓いながら叶わなかったように、戦争は個人の想いを無情に踏みじりまします。この国がこれからもずっと平和であり続けることを、私たちは心から願っています。



満州引き揚げと家族の記録

保田 恵子さん（岬町・昭和15年生まれ）

満州の地に眠る2人の姉弟

満蒙開拓青少年義勇軍だった父のもと、私は満州で生まれました。

2人の姉弟がいて姉はすぐ亡くなり、弟もジフテリアになり命を落としました。弟の遺体はリング箱に入れて畑に埋めました。母は弟の横で「2人で死のうか」と言うようになりました。

そんな時、日本兵に声をかけられ、満州から日本に帰る人たちのところに行くことができました。

「内地（日本）へ帰ったら、お姉ちゃん、クルクルボン（お菓子）食べような」と、弟がよく言っていたことを思い出します。



満蒙開拓青少年義勇軍の父



母と保田さん

20日間にわたる逃避行

昼は隠れ夜に動く生活でした。ロシア兵に見つかり、女性がひどい目に遭うこともありました。母たちは髪を短く切り、男のような服で逃げました。

私たちは「ドウ」という名の中国人を雇っていました。ある夜、ドウさんが「ホーテン！（保田）」と呼びながら、ゆで卵をどっさり持ってきました。夜中に卵を抱えて2度も届けてくれ、みんなで食べました。母はもう一度会いたいと亡くなるまで感謝していました。

父の故郷 和歌山へ

逃げ続けた末、私たちは引き揚げ船に乗れました。舞鶴港から和歌山駅まで戻ってくると一面焼け野原で、母は驚いていました。

父の故郷・梶取へどう帰るか途方に暮れていた時、人力車の車夫が厚意で里まで乗せてくれました。夜7時頃、泥だらけで服も破れた姿に家族は驚きましたが、車夫の説明で私たちだと分かったのです。

父との別れ、母と歩んだ戦後

満州から出征した父は行方不明でした。帰国後、夜中に「お父さんが帰ってきた」と家を飛び出すこと

もありました。

やがて父の実家を離れ、大阪で母と三畳一間の暮らしを始めました。「家買おう」と母はよく言っていました。私は中学卒業後すぐに就職。母も朝から働き、食事や入浴を1人で済ませる毎日でした。近所で同じ名前の子が「ケイコ、ごはんやで」と呼ばれる声を聞き、「あんなふうと呼んでもろたことないわ」と、寂しい思いをしました。

それでも家を買うために母と力を合わせ懸命に働きました。父が旧ソ連の収容所で亡くなったと通知が来たのは平成25年（2013年）でした。

戦争を知らない世代へのメッセージ

今も世界で戦争が起きていますが、テレビで見ていると「こんな戦争なんですか」と思います。何のために、みんな殺し合いをするのか。それだけが一番腹が立ちます。幸せな暮らしが急になくなってしまふ戦争だけはしないで欲しい。私はそれだけは言いたいです。



15歳の目に映った戦争

峯野 繁信さん（堺市・昭和5年生まれ）

戦時下の日常と人々の暮らし

父が赤紙で戦地へ送られると、残された母は父の無事を祈り、毎日4~5km離れた神社まで歩いて通いました。作ったお米や芋はほとんどが国に強制的に買い上げられ、芋の「ひげ」と呼ばれる残った根の

部分を蒸して食べるなど、食糧難に苦しみました。一方で、村に駐留していた兵隊から空襲がない日には、こどもたちが羊羹をもらうこともありました。人々は必死に日々の生活を営んでいました。

戦時下の学校教育

当時は「進め進め」という国家方針が社会を覆い、学校では教育勅語の暗記が強制されました。個人より国家への奉仕が優先され、村で戦死者が出ると村葬にこどもたちも参列しました。

終戦後は、戦争関連の書類を燃やし隠すなど、人々は必死に抹消しました。

故郷を襲った焼夷弾の雨

一番怖かったのは空襲でした。ラジオで敵の爆撃機が来ると知らせる警報が流れると、人々は急いで灯りを消し、町は真っ暗になりました。当時の私を含むこどもたちはする事が無く裏山に登ってみると、神戸の空が焼夷弾で真っ赤に燃えているのを見ました。その後、私の住む堺も空襲を受け、町のほとんどが焼けてしまいました。3日たってもガード下では焼夷弾が燃え続けていました。あたりは焼け野原で、土蔵だけが残っていました。

父の帰還と終戦の日の思い出

およそ9年にわたる従軍を終え、父が帰ってきたのは終戦の直前のことでした。しかし、長い間離れて暮らしていたため、他人のように感じました。「戦争、戦争」と口にすることもあり、近寄りがたい時もありました。

終戦を迎えた8月15日は、地元で盆踊りの準備をしている最中でした。近所の家でラジオ放送を耳にしましたが、こどもだったため、何が起きたのかわかりませんでした。日本の敗戦を知ったのは、2日ほど経ってからのことでした。

父は戦争に負けたら、大変な事になると話していましたが、実際に訪れたのは平和でした。しかし、戦争が終わり、兵隊に行かなくて済むという安堵感と将来への不安が入り混じり、複雑な心境でした。

戦争を知らない世代へのメッセージ

戦争を体験した者として、願うのは「平和であってほしい」ということです。

自分の思うままに振る舞うことを「平和」だと考えていませんか？

現代には「平和」と「自由」を履き違えている人が居るのではないかと危惧しています。

それは本当の意味での平和とは異なります。

戦争を知らない世代の皆さんには、「平和」の意味を正しく捉え、この国が二度と戦争への道を選ばないように、本当の「平和」を考え続けていってほしいです。



「大和」の父、安らかに

よしむら たかし
吉村 孝史さん (大阪市・昭和17年生まれ)

「大和」の父と母の結婚

昭和16年(1941年)12月、戦艦「大和」が就役し、父も兵役に就くことになりました。

父は出征前に結婚しておきたいという思いがあったのか、奈良の実家に相談をし、近くに住んでいた母と縁談が持ち上がりました。お互いによく知らぬまま、昭和16年(1941年)3月頃に父が奈良へ戻り、見合いを経て結婚。そのまま短い新婚旅行に出かけ、父は再び呉へ戻っていったそうです。

結婚したのが昭和16年(1941年)。昭和20年(1945年)の終戦までの約5年間、母が呉を訪ねたのは年に1度ほどで滞在も2泊程度。通算しても、2人が過ごした時間は10日ほどだったと思います。

父は最期の出航になる日に会いに来てほしいと母に伝えましたが、美容師の仕事があり会うことができませんでした。母はその事を、生涯を通して「いくら悔やんでも悔やみきれない」と語り続けていました。



母と吉村さん

幼心に焼き付いた空襲の夜の記憶

私が3歳だった昭和20年（1945年）の春、奈良に居ました。

夜に空襲警報が鳴り響き、私は近所の人たちと防空壕へ駆け込みました。その時、西にある金剛山の方を見ると、空が真っ赤だったのです。「夜なのに、どうしてあんなに空が明るいのだろう」と異様なほど印象的だった事を覚えています。その光景は、後に大阪大空襲によるものだと知りました。

「戦争の悲惨さ」とは

父の兄弟は、4人のうち父を含めて2人が戦死しました。さらに、私が育った100軒ほどの小さな集落では、墓地の入り口に15基もの戦没者の墓標が並んでいます。身内だけでなく、地域全体を見渡しても、10軒に1軒以上の家が戦争で家族を失っていたのです。日本のどの地域でも、私たちの集落と同じような状況でした。これはもう、大変なことだと思いました。

戦争を知らない世代へのメッセージ

父の足跡をたどるうちに、私は戦争の悲しい姿をより深く知ることになりました。そして、戦争で亡くなった方々を慰霊することが、平和を考える上で最も大切な一歩だと思うようになりました。天災は避けられませんが、戦争は人間の意思によって「やらない」という選択ができるはずです。祖母は「自分の子どもを先に亡くすことほど辛いことはない」と話していました。この耐え難い悲しみを二度と生まないためにも、

まずは犠牲となった一人ひとりの命に思いを馳せ、その死を悼むことから始めるべきです。それが、未来の平和を築くための原点になると私は信じています。



父と吉村さん



広島県での被爆

まきはら きよこ
牧原 清子さん（守口市・昭和16年生まれ）

幼い私の両親のこと

母は私が2歳の時に病死しましたのでほとんど知りません。父のことも、はっきり覚えているのは、戦争に出るため港を出発する一瞬の光景だけです。そのときの軍服姿だけ覚えています。父は戦地に着く前

に海上で攻撃を受けて戦死したそうです。そのため、
 父母の思い出はほとんどありません。

いつもの日常が一変した8月6日

昭和20年（1945年）8月6日、当時4歳だった私は、祖母の家から200メートルほどの距離にある近所の友達の家へ遊びに行っていました。家の中から「上がっておいで」と声をかけられたことだけは覚えています。でも、そのあと何が起きたのかは、思い出せません。気づくと、私は家の下敷きになっていました。何とか外に這い出ると、目の前に広がっていたのは真上から潰された家々や瓦礫の山。空気は熱く、煙で息が苦しく、視界は真っ暗でした。周りを見渡すと、焼けただれた多くの人々が声を上げ、泣き叫びながら逃げ惑っていました。

苦しむ人々で覆いつくされた広島

私が住んでいた祖母の家は天ぷら屋でした。原爆の直後、目の前には火傷を負った人々が次々と押し寄せてきました。当時、やけどには油が効くと言われていたのです。人々は「水をくれ」と叫びましたが、家には水がありません。次第に、家の前で一人、また一人と力尽きて倒れていきました。

火傷を負った叔母を懸命に治療した日々

原爆で火傷を負った叔母は、山の中の小屋で世話を受けることになりました。治療に使える薬はひとつもなく、できることといえば、きゅうりとじゃがいもをすりおろし、その汁を火傷の箇所にあてることだけでした。体の半分が火傷で焼けただれた叔母の姿を見ながら、私は擦ったきゅうりやじゃがいもを火傷にあてる手伝いをしました。夏の暑さで傷口周辺にハエがたかり、ウジ虫がわき、臭いは強烈でした。叔母は痛みを耐えながら泣き続け、私はその泣き声を聞きながら、綿を貼り替え続けました。

戦争を知らない世代へのメッセージ

私は原爆の惨状を語る時、どれだけ言葉にしても、あの恐怖や痛みを完全に伝えることはできないと感じます。けれど、それでも語り続けずにはられません。なぜなら、二度と同じ苦しみを、未来の子どもたちに味わわせたくないからです。原爆がもたらした悲劇は、戦争を起こさないことの大切さを、私に教えてくれました。生き延びたからこそ、伝えられることがあると信じています。苦しみと恐怖を、言葉にして語ることで、平和への意識を次の世代に届けたいのです。



戦死した父、戦後の母の苦勞

おおもり まさみ
大森 正美さん（高槻市・昭和14年生まれ）

父の戦死と海底の記憶

私の父は3度目の召集で戦地へ向かう途中、乗っていた商船「多摩丸」が撃沈され、戦死しました。船にはおよそ600人が乗っており、撃沈は7分という短い時間で起こりました。幸運にも200人ほどは救助されましたが、父は船内にいたため、海底4,000メートルの深さに沈んでしまいました。引き上げることも、潜って確認することもできず、父の遺体は今も海の底に眠っています。慰霊のためにパラオを訪れた際、父と共に沈んだ知人の方がいたことも知りました。私はサンゴを持ち帰り、墓の石塔の前に埋めました。

戦時下の暮らしと家族の支え

父を失った私は、母や家族の支えを受けながら、戦時下の厳しい生活を耐え抜きました。母は日中、田んぼを手伝い、夜は裸電球の下で針仕事をしていました。妹と2人で、寂しくちゃぶ台を囲んで夕食をとったことが印象に残っています。食料は十分ではなく、家にお米はありましたが、保存食がほとんどなく、飢えをしのぐため、さつまいもの芋づるやタンポポを料理したりイナゴを瓶に詰めて炒って食べました。母方の祖父は、自転車やリヤカーに野菜や米を積んで食料を補給してくれました。

防空壕の中から見た大阪大空襲

私の町から南を見渡すと、大阪の空が赤く燃えているのが遠くに見えました。大阪大空襲です。防空壕に身を隠していると、空から落ちてくる焼夷弾の光が夜空でキラキラと輝きながら落ちるのを覚えています。空襲の被害は町全体に広がり、多くの人々が命を落としました。

罪のない子どもたちを狙う機銃掃射

私の町でも、戦争の影響は日常にまで及んでいました。子どもを狙った機銃掃射が実際にあり、神社に避難していた子どもたちは、その脅威にさらされました。幸い命は助かったようですが、銃弾の衝撃で屋根が摩擦熱により燃え上がったと聞いています。

戦争を知らない世代へのメッセージ

私は墓参りをするたび、父や戦没者の前で誓います。「二度と戦争は繰り返さない」と。これは父だけでなく、自分自身にも言い聞かせています。現代においても、戦争の犠牲は病院や学校など民間施設に及んでいます。海外の報道を見るたび、戦争の卑劣さと無慈悲さが世界で繰り返されていることを痛感します。姑息な戦争行為は非常に残念で、あってはならないことだと思います。戦争の恐怖を知り、二度と同じ過ちを繰り返さないでほしい——それが、戦争を経験した私たちの切なる願いです。



戦時下、山の中での授業

ひめの きよし
姫野 浄さん (大阪市・昭和10年生まれ)

戦争が始まった朝、変わる学校

私は大分県坂ノ市町の小学校に入学しました。入学した年の12月、太平洋戦争が始まり、学校の様子は一変しました。尋常小学校は国民学校と名前を変え、校庭中央には天皇・皇后の写真を飾った奉安殿が建てられました。毎朝の朝礼では校長の訓示に続き、教育勅語が朗読され、幼い私たちは「天皇の赤子として戦争に従うべきだ」と教え込まれました。授業だけでなく、柔道や剣道、竹槍訓練も行われ、私は神風が吹けば日本は負けないと信じ、学び、鍛えていました。戦争一色の教育の中で、日々覚悟を求められていたのです。

山の中での授業と恐怖の日常

戦況が悪化すると、学校での授業ができなくなり、私たちは山間学校に移されました。山の中に机や椅子を運び、先生は上の方から叫ぶように授業を行うのです。通学路も危険で、アメリカ軍のグラマン戦闘機が突然現れ、山の谷間から急降下して機銃掃射を行うこともありました。私たちは川や田んぼの畦、土手の窪みに身を隠し、恐怖に震えながら帰宅する日々を送りました。

兄の死が教えた戦争の無情

兄は鹿児島海軍航空隊に所属していましたが、終戦の数ヶ月前に戦死しました。届いた遺骨は石ころと髪の毛だけで、家族でその白木の箱を開けたとき、私たちは言葉を失い、戦争の無情さを身に染みて感

じました。広島・長崎への原爆投下や、毎日のように報じられるB29爆撃のニュースを聞きながら、国民には「日本は負けない」という情報しか届かず、目の前の現実との違いに多くの人が混乱していました。

新しい憲法に出会い、平和の意味を知る

戦後、新制中学に進んだ私は、憲法教育を通じて戦争の意味を改めて考えるようになりました。「主権は国民にある」という新しい憲法の考えが、私たちにはなかなか理解ができませんでした。これまで戦時教育で教え込まれてきたこととは全く違う世界です。授業では、平和の大切さや国民一人ひとりの権利について学びました。

戦争を知らない世代へのメッセージ

戦争は政府が起こすものです。だからこそ、国民一人ひとりが「戦争を止める」という意識を持つことが大切です。私が幼い頃に経験した戦争は、命や日常を一瞬で奪う恐ろしいものでした。若い皆さんには、歴史を学ぶだけでなく、この現実を心に刻み、平和を守り、戦争を起こさせない政治をつくる意識を持つてほしいのです。平和は当たり前ではありません。私たちの行動や判断が未来を決めるのです。



遠い父の記憶と消えぬ思い

額田 利一郎さん（枚方市・昭和14年生まれ）

父のわずかな記憶

父が召集令状を受けたのは、昭和18年（1943年）6月頃のことでした。戦地へ向かうことが決まっていた父に会うため、母と叔父に連れられて、幼かった私も一緒に大分県佐伯市へ出向きました。南方のフィリピンへ出港する船の前で、父に抱き上げられた記憶だけをうっすらと覚えています。

戦争と隣り合わせの毎日

空襲が激しくなる中、母と近所の人々と一緒に、家の裏手の竹やぶに防空壕を掘りました。穴を掘って青竹を割り、交互に組み合わせて防空壕を整え、むしろを敷き、さらに固い布団を重ねて身を守りました。

実感を持つことができなかった父の死

昭和20年（1945年）7月に父は戦死しました。わずか33、4歳という若さでした。その知らせを受けたのは、私が小学校に入学する前年のことです。親族に連れられて天満橋へ「遺骨」を受け取りに行った日のことを、今でもはっきりと覚えています。焼け野原となった街は、歩く道に瓦礫やトタンが散らばっていました。そこで受け取ったのは、海で亡くなった父の本当の骨が入っているはずもない白木の箱でした。

父の形見を着て臨んだお葬式

葬儀の日、父が生前に実家から持ってきていた仙台平袴を仕立て直し、幼い私に履かせてくれました。それは父の兄弟たちの「せめて形見を息子に受け継がせたい」という思いだったのでしょう。その袴を履いたことを覚えています。年月を重ねるたびに、「なぜ負けると分かっていた戦争に父は命を捧げなければならなかったのか」と考えます。私は今、父の3倍近い歳月を生きることができています。

戦争を知らない世代へのメッセージ

戦争は「殺し合い」にすぎません。どれほど立派な事を掲げても、そこには必ず犠牲者が生まれ、誰かの命が奪われます。核兵器のような破壊力を持つものが再び使われることがあれば、人間はどうなってしまうのかと思います。だから「二度と繰り返してはならない」という気持ちが強くなるのです。戦争は決してあってはならないものだと、次の世代、そのまた次の世代には、絶対に戦争を経験させてはなりません。



「太田さん」から聞いた戦地の父

佐野 映子さん (箕面市・昭和17年生まれ)

生後8ヶ月の娘を残し、戦地へ向かった父

父は、私が生後8ヶ月の時に出征。父が赴いたのは、過酷な激戦地として知られるニューギニア島です。母と私は母の実家で暮らし、そこには大家族の13人が集まっていました。おじいちゃんを中心に日々が回っていて、父がいないことを私はあまり意識せず過ごしていました。小学校に入ると、「お父ちゃんがこう言った、ああ言った」と友達の話聞き、お父さんって、社会のこととかを教えてく



父と母と佐野さん

れる人なんだと思いました。母はあまり感情を表に出す人ではなく、父のことを尋ねても「優しい人だった」とだけ教えてくれました。

母の強さと日々の暮らし

母は私を育てるため、働きづめの毎日でした。精米業の仕事で重い荷物を自転車に乗せ、往復して家計を支える姿を、私はずっと見ていました。夜は必ず本を読んでくれて、眠る前の時間は母と私の大切なひとときでした。母は父のことをあまり語りませんが、母の心の中に、父への思いがずっとあるのを感じていました。父の戦死の通知を受け取った時、気丈な母が声をあげて泣いた光景を、今も忘れられません。

戦友が語ってくれた父の最期

父の最後の姿を知ったのは、戦友の太田さんからでした。襲撃任務の先頭を父が太田さんの代わりに務め、敵に撃たれて翌日亡くなったという話を聞きました。地図を持たずに山を越え、ジャングルでの過酷な生活、食べ物も満足に得られない日々、自然の中で生き抜く父達の必死さが、言葉から伝わってきました。

父への思いと平和への願い

「父へ」

お父さん 一人娘の赤ん坊はあなたを奪われた悔しさを「戦争反対」という四字に重ねて歩み始めました

お父さん あなたの無念の思いを灯にして 娘の行く手を照らしてください

いあなたや、母や、私の悲しみが人々に伝わり 平和を守るささやかな力になりますように 娘の私が多くの人々と手を取り合って 平和を守り抜くことができますように (「父へ」から一部抜粋)

わが父よ あなたに人は撃てざると 信じて生きし 長き戦後を



父と佐野さん

戦争を知らない世代へのメッセージ

パプアニューギニアの人たちに敵意などまったくなく、そこに生きて暮らしていただけなのに、戦争という名の下に、何の罪もない人々が命を奪い合わされる。これほど不条理で悲しいことはありません。私は心から「戦争は本当にあってはならない」と思いました。



戦死した父とビルマへの思い

たかはし みのる
高橋 稔さん (大阪市・昭和11年生まれ)

戦地へ向かう父を見送って

私の父は、映画関係の仕事に就いており、無声映画の上映中に内容を解説する弁士をしていました。ところがある日突然、「ビルマ（ミャンマー）へ行く」と言い出したのです。出発の日、大阪駅にあった食堂で、同業者や親戚、近所の人たちが盛大に送別会を開きました。私は小学校2年生で、父をホームから走って見送ったことを今でも鮮明に覚えています。それが、父との最後の別れになりました。

不安と安堵の気持ちに包まれた終戦の日

私は父の実家がある兵庫県養父市へ疎開しました。言葉も習慣も違う土地でしたが、都会から来た私を気遣い、先生や友人たちは温かく迎えてくれました。8月15日、親戚と一緒に正座し、玉音放送を聞きました。言葉が難しく理解できませんでしたが、周囲の人々の話で、「戦争が終わった」とわかりました。空襲などがなくなるんだと安堵したことを覚えています。

送られてきた父の髪の毛と親指の遺骨

戦後、疎開先から大阪に戻った私は、母から父の戦死を知らされました。父は昭和19年（1944年）6月、ビルマで亡くなったと言われていますが、記録はほとんど残っておらず、戦死通知が届いたのは戦後1年以上経ってからでした。当時、戦死者の遺骨は白木の箱に名前の紙切れだけが入れられて渡されるのが一般的で、父の場合は戦病死だったので、髪の毛と親指が遺骨として残されており、母と親族の手で墓に納められました。

戦地への慰霊と帰還兵の声

定年退職後、私は遺族会の活動に携わり、ミャンマーでの慰霊巡拝に参加しました。現地に建てられたパゴダ（仏塔）や慰霊碑に花を手向け、亡き人々を偲びました。帰還兵の方からは、インパール作戦の悲惨な体験をよく聞きました。地図も作戦もなく山中を進み、大八車の車輪が壊れれば荷物を失い、食料は尽き、仲間は次々と倒れていく。銃撃で死ぬのではなく、餓死や病で命を落とす人が多かったのです。退却の道は「白骨街道」と呼ばれ、行き倒れた兵士の骨が残されていました。「若い世代には、こんな体験をさせたくない」と帰還者は皆、言っていました。

戦争を知らない世代へのメッセージ

私が強く伝えたいのは、「平和の大切さ」です。戦争は必ずどちらかが仕掛けることにより始まります。そして多くの場合が「自分の思い通りにならない」「我慢できない」という理由がきっかけです。その結果、命を奪い合う状況に発展し、数え切れない犠牲と、何気ない日常が失われていくのです。平和とは、決して特別なものではありません。夫婦で語り合い、こどもと遊び、家族と食卓を囲む。そうした日常の一つひとつの中で平和について真剣に考えてほしいと願います。



帰国者（中国残留邦人）の家族

しもおか じゅんこ
下岡 純子さん（八尾市・昭和40年生まれ）

満州への渡航と戦争の混乱

和歌山県新宮市に生まれた父は、昭和19年（1944年）、10歳の時に家族と満州へ渡りました。国策により、家や畑、家畜が支給される約束での移住でした。昭和20年（1945年）8月、ソ連軍の侵攻により生活は一変します。ソ連軍から逃げるため、父の一家は夜の山道を懸命に歩き、避難先の延吉市の小学校には各地から約2万人の日本人が集まっていた。食料は不足し、飢えや病気で命を落とす人が少なくありませんでした。一家は村へ戻りましたが、祖母は餓死し、祖父は凍死。残されたのは姉（伯母）と兄（伯父）、末っ子の父だけでした。

残された兄弟と生き延びるための暮らし

孤児となった3人は、食べ物を求めて村々をさまよいました。そんなある日、食べ物を取りに出かけた父の姉が帰ってこなくなりました。父の兄と父が必死に探し回り、しばらくして再会する事ができました。その後、父の姉は中国人と結婚し、父もその嫁ぎ先に身を寄せ、幼くして家畜の世話や農作業に従事するようになります。一方で、父の兄は敗戦を受け入れられず、日本語だけを話し続けたため周囲と対立し、家を出ていきました。父は26歳の時に小児麻痺を患う女性と



中国での家族写真

結婚。昭和40年（1965年）に私が生まれ、父はとても嬉しかったそうです。

日本とのつながりと帰国の夢

昭和47年（1972年）、日中国交正常化後、中国残留邦人の調査が進み、昭和50年（1975年）、父は父の姉と共に日本へ一時帰国しました。日本への思いは強かったものの、社会に馴染めるか分からず、言葉も分からない、そして障がいのある妻と4人の子どもを連れての移住はできず、再び中国に戻りました。父は「本当は日本に帰りたい」と願いながらも、中国で家族を養い続けました。平成6年（1994年）、私に日本への帰国の話が届き、保証人のある岐阜県の縫製会社を頼りに、私は日本行きを決意しました。父が果たせなかった夢を、子の私が実現したのです。

日本での生活と父の思い

平成6年（1994年）9月、私は妹と共に来日し、翌年から大阪の八尾市に住むようになりました。それ以来30年、この地で暮らしています。父は「もし戦争がなければ、日本で幸せな生活ができたかもしれない」と語りつつも、最後に日本へ戻る事ができたことを心から喜んでいました。



日本に来た下岡さんの父と母

戦争を知らない世代へのメッセージ

世界は今も平和ではありません。ニュースで戦争の報道を見るたびに胸を痛めます。戦う兵士だけでなく、何の罪もない市民までもが犠牲になっている現実を目の当たりにするたびに、同じ悲劇を繰り返してはならないという思いを強くしています。

戦後80年平和祈念・大阪戦没者追悼式

開催日：令和7年7月29日

開催場所：大阪国際交流センター

実施内容：開式のことは、国歌斉唱、黙とう、式辞、追悼のことは、献花、平和への誓い、平和の合唱、閉式のことは

先の大戦により失われた12万7千余名もの尊い命に対し、心から追悼の誠を捧げ、再び戦争の惨禍が繰り返されることのないよう、その教訓を次世代に語り継ぎ、恒久平和への誓いを新たにするため、毎年「大阪戦没者追悼式」を大阪府・大阪市・堺市の共催で実施しています。

戦後80年という節目の式典開催となる令和7年は、戦争体験を次世代に継承していくための取組として、先の大戦に関するパネル展示や遺族等による戦争体験談及び平和学習に関する記録動画の上映も実施しました。



● 追悼のことは



● 献花



● 献花



● 平和への誓い



● 平和への誓い (奥山 真凧さん・璃音さん)



● 平和への誓い (田川 史佳さん)



● 平和への誓い (中山 文さん・翔太さん)



● 平和の合唱 (学校法人相愛学園 相愛高等学校)



● 平和の合唱



戦争体験談を聞いて平和の大切さを学び考えよう

開催日：令和7年5月18日

開催場所：ピースおおさか大阪国際平和センター

実施内容：平和学習用アニメ鑑賞、館長によるガイダンス、施設見学、戦争体験談、紙芝居、平和を願うメッセージの作成

戦後80年平和祈念・大阪戦没者追悼式の関連事業として、平和学習の一環である「戦争体験談を聞いて平和の大切さを学び考えよう」を実施しました。

小学生から高齢者まで幅広い年代の方にご参加いただき、「平和を願うメッセージ」を作成いただきました。

本事業で作成しました「平和を願うメッセージ」は、代表者の方により大阪戦没者追悼式における「平和への誓い」で発表いただきました。

● 平和学習用アニメ鑑賞



● 館長によるガイダンス



● 施設見学



● 戦争体験談(岡倉 三郎さん)



● 紙芝居(井上 倫子さん)



● 平和を願うメッセージの作成



平和を願うメッセージ ①



おくやま まな
真風さん
りんの
璃音さん

先日、ピースおおさかで実際に戦争を体験した方のお話を聞くことができました。私のひいおじいちゃんも戦争に行っていたらしいのですが、私が生まれた時には既に亡くなっていて、戦争の話を直接聞くことができなかつたので、見たことのないひいおじいちゃんのことを思いながら聞かせていただきました。

私のおばあちゃんは、ひいおじいちゃんが戦争が終わったあと、満州から帰ってきてから生まれた子どもだそうです。ということは、ひいおじいちゃんが戦争から生きて帰ってこなければ、私はこの世に生まれていないことになります。

戦争が起こると、戦いに行った人だけが亡くなるのではなく、その人の後に続く子どもたち孫たちの人生もまた失くなってしまいます。

そう思うと、今ここにいるのは、私ではない誰かだったかも知れません。私は、今、この人生を歩める幸せに感謝しながら、命の繋がりさえ断つ戦争の悲惨さをしっかりと後世に伝えていきたいと思ひます。

平和を願うメッセージ ②



たがわ さとえ
田川 史佳さん

戦争があった時代に生まれていたら、どれだけ当時の人々が苦しんだのか、戦争がどれ程ひどく人々を傷つける出来事であったかを思い知ることができただろう。そして、今の私の幸せを感じています。

私の曾祖父は、祖父が小さいときに戦死しました。一枚の写真以外、何の記憶もないそうです。私は祖父を曾祖父に会わせてあげたいという思いでいっぱいです。

そのことを思うと、父が毎日仕事から帰って来るありがたさを実感しています。二度と戦争が起こらないで欲しいと思うしかありません。戦争がどれ程人々を傷つけ、苦しめるのかを、私ももっとよく知り、いろんな人にも知ってもらいたいです。そのため、私は戦争のない平和について、もっと学んでいきたいと思ひています。

平和を願うメッセージ ③



なかやま しょうた
中山 翔太さん

今も世界では戦争をしている国があるので戦争ではなく話し合いで解決することができたら良いと思ひました。

二度と戦争がない世界がくれたら良いと思ひました。

世界中から戦争がなくなれば良いと思ひました。

平和を願うメッセージ ④



なかやま あや
中山 文さん

戦争体験談を聞いて一番心に残った言葉は「戦争で亡くなった人への供養は何か。」「それはこの国が平和で発展していくことなんじゃないか。」と言う言葉です。

戦争で沢山の命が失われてしまったので今の平和を大切に先人に感謝し、今後、戦争を起こさないように世界中の人と話し合い平和であり続けなければならないと思ひました。

平和であり続けるために、まず身近な人に優しくお互いに助け合い生活していきたいと思ひます。

子どもたちにも「二度と戦争を起こさない。」という思いを持って大人になってもらいたいと思ひます。

平和を願うメッセージ

伝えたい 戦争のおそろしさ 平和のすばらしさ

守りたい 子どもたちの未来 日々の幸せ みんなの笑顔

考えたい 今までのこと 戦争のこと

これからのこと 日本のこと、世界のこと、地球のこと

(平成 27 年度 沖縄「なにわの塔」慰霊追悼式・世代間交流平和学習事業参加児童・生徒一同)

平成27年4月(戦後70年)に実施した沖縄「なにわの塔」慰霊追悼式・世代間交流平和学習事業に参加した児童生徒の皆さんが、平成27年8月開催の「戦後70年平和祈念・大阪戦没者追悼式」で披露するため共同作成したものです。

「大阪戦没者追悼式」公式 YouTube チャンネルは、
右記の 2 次元コードからご覧ください。

